

西尾市遺跡解説パンフレット

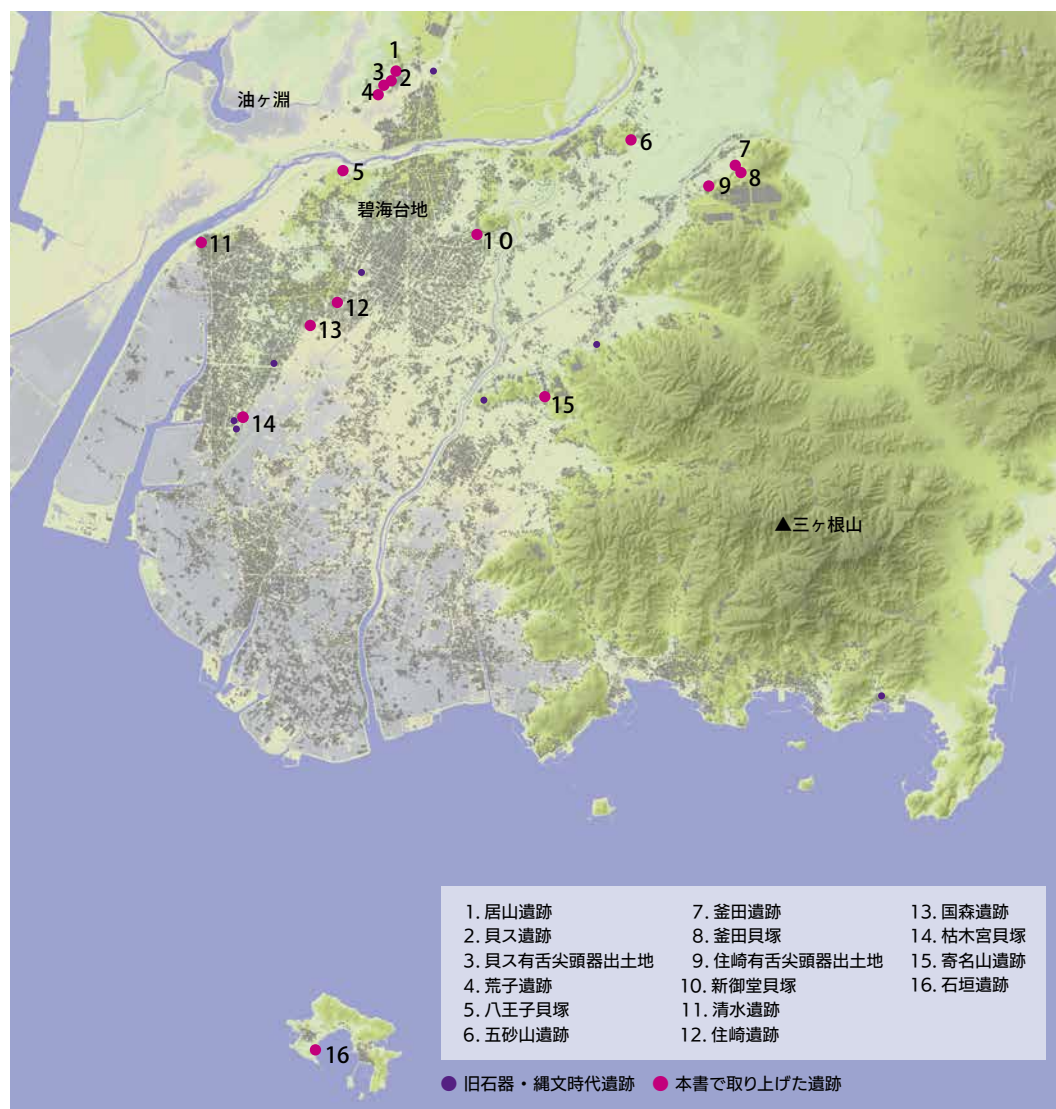
旧石器・縄文時代の西尾



西尾市教育委員会

西尾市は西三河平野の南端に位置し、その歴史は今から15,000年以上前の後期旧石器時代まで遡ります。

豊かな丘陵、安定した台地、農耕に適した沖積低地、そして海。西尾の変化に富んだ自然環境の中で、人々はどのような生活を営んできたのでしょうか。これまでの調査成果や出土品を手掛かりに、西尾の旧石器時代から縄文時代を紹介します。



「主要遺跡解説 遺跡分布図」

西尾市域では、現在約20か所での旧石器・縄文時代の遺物が確認されています。そのうち旧石器時代の遺物が出土した遺跡は3か所のみで、遺構は確認されていません。縄文時代になると定住化が進み、貝塚が伴う場合も多く、遺跡数は大幅に増加します。特に縄文時代後・晩期(約4,500～2,400年前)には八王子貝塚や枯木宮貝塚といった大規模な貝塚遺跡が形成され、縄文土器や石器・土偶・骨角器・装飾品など多様な考古資料が発見されています。発見された遺物や遺構は、縄文時代の生活や精神活動、交流などを知る有力な手掛かりとなっています。

これらの遺跡の多くは当時の海岸線に近い碧海台地の縁辺部に立地していますが、台地から続く低地部に所在する遺跡もあります。人々は海や地形を利用し、気候変動による環境変化に順応しながら生活を営んでいました。

表紙写真：(上段左上より)八王子貝塚空中写真、八王子貝塚出土の深鉢(2点)、釜田貝塚の赤彩土器、寄名山遺跡出土のナイフ形石器、住崎・貝ス採集の有舌尖頭器、枯木宮貝塚出土の埋葬犬骨

原始時代の幕開け

後期旧石器時代～縄文時代草創期



西尾市域で確認されている最古の遺物はナイフ形石器です。今から15,000年以上前の後期旧石器時代に作られたもので、この時代は更新世と呼ばれる氷河時代にあたり、人々は定住せず獲物を追いながら移動を繰り返していました。

やがて縄文時代に移ると気候の温暖化が進み、土器や弓矢などが発明され、竪穴建物を築きムラを営むようになります。しかし縄文時代草創期の土器は西尾市域では発見されておらず、この地域の人々はまだ旧石器時代とあまり変わらない移動生活を送っていたと考えられます。

寄名山遺跡 (吉良町瀬戸／後期旧石器時代)



全長2.8cm

ナイフ形石器

市内で発見された最も古い考古資料です。今から約15,000～20,000年前の道具で、木の棒などに装着して槍として狩猟に使用したと考えられています。豊川以東で産出するチャートで作られています。

枯木宮貝塚 (寺津町・巨海町／後期旧石器時代)

市指定文化財



全長2.4cm

細石核

ナイフ形石器に次ぐ古い遺物で、今から約15,000年前のもので、細石刃を剥ぎ取った後の芯の部分にあたります。枯木宮貝塚からは同じ石材の剥片も出土しており、遺跡周辺で石器製作が行われた可能性があります。



貝ス採集
全長7.1cm



住崎採集
全長4.0cm

貝ス有舌尖頭器出土地 (南中根町／縄文時代草創期)

市指定文化財

住崎有舌尖頭器出土地 (下羽角町／縄文時代草創期)

市指定文化財

写真左の有舌尖頭器は第二次世界大戦以前に南中根町貝ス遺跡周辺で、右の有舌尖頭器は昭和40年に下羽角町住崎でそれぞれ住民によって採集されました。

有舌尖頭器は縄文時代草創期に特徴的な遺物で、単独で採集される事例が多く、槍として使用されそのまま放置されたものと思われます。矢作川流域にみられる有舌尖頭器の分布状況から、人々の活動エリアは旧石器時代に比べさらに拡大したと考えられます。

両資料ともに市指定文化財に指定されており、市域における縄文時代草創期の狩猟活動を考える上で貴重な資料です。

縄文海進と人々の暮らし

縄文時代早期～縄文時代中期



縄文時代草創期から早期へと移る今から11,000年前頃には最終氷期を迎え、その後気候は温暖期に転じました。急激な温暖化により海面上昇が進み、約7,000年前の縄文時代早期末頃のピーク時には、現在より数メートル海面が高くなったと考えられています。これを「縄文海進」と呼びます。

大きく環境が変化し、縄文時代の人々は定住生活を営むようになりました。西尾市域でもこの時代の土器が見つかっています。

くにもり 国森遺跡 (国森町／縄文時代早期)

碧海台地東縁に位置する弥生～戦国時代にかけての複合遺跡です。令和2年度に実施した第3次調査で土坑内から縄文時代早期の押型文土器が見つかりました。市内最古の土器です。



しみず 清水遺跡 (中畑町／縄文時代早期～前期・晩期)

矢作川左岸の碧海台地縁部に位置する遺跡です。矢作川最下流部の貝塚を伴う集落遺跡で、台地から下った沖積低地から縄文時代前期の遺物包含層が見つかっています。遺物は早期末～前期・晩期の土器が出土しています。



かまた 釜田貝塚 (上羽角町／縄文時代前期)

標高約10mの丘陵裾に営まれた貝塚遺跡です。市内最奥部の鹹水性の貝塚で、現在の海岸線から10.5kmも内陸に入った地点に所在しており、縄文海進時に形成された遺跡だと考えられます。

土器・石器・貝や動物の骨などが出土し、中でも約6,000年を経ても色鮮やかなベンガラが塗られた鉢形土器は本貝塚を代表する遺物です。

* 鹹水性の貝塚・・・海水域に生息する貝で構成された貝塚



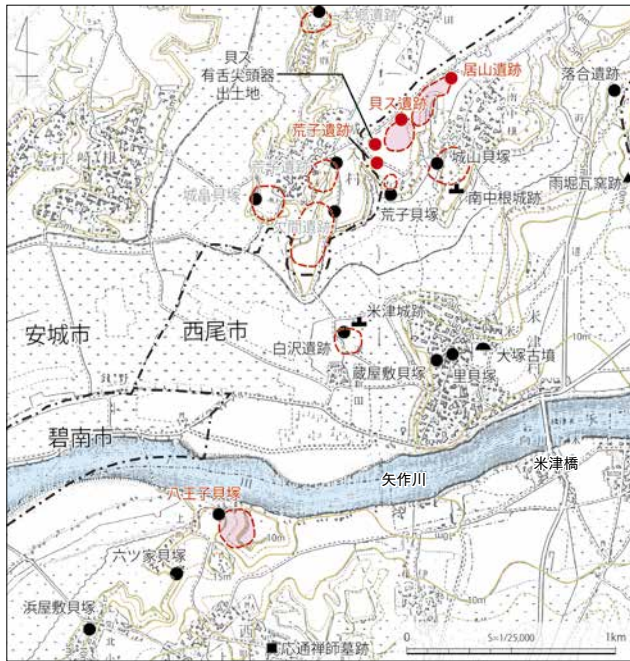
釜田貝塚 と釜田遺跡

釜田貝塚から西へ約50m離れた標高7.5mの低地部には、釜田遺跡(縄文時代後期)が所在しています。釜田遺跡は貝類の出土が認められないことから、縄文時代後期以降の海退によって開けた低地部を利用した遺跡と考えられます。

北浦の縄文時代遺跡

西尾市域北部のかつての油ヶ淵に面した碧海台地上には、貝ス遺跡、居山遺跡、荒子遺跡、八王子貝塚など、縄文時代の遺跡が多く分布しています。油ヶ淵の形成以前、この辺りの沖積低地は北浦と呼ばれた海の入江で、遺跡は入り江を臨む碧海台地上に形成されました。

特に貝ス遺跡、居山遺跡、荒子遺跡はいずれも縄文時代中期以降に形成されており、油ヶ淵の入江周辺の縄文文化を考える上で重要な遺跡となっています。



北浦周辺の遺跡(明治23年測図大日本帝国陸地測量部「桜井村」より作成)



遺跡遠景(平成31年撮影／南東から)

かいす 貝ス遺跡(南中根町／縄文時代中期～後期)

朝鮮川右岸の碧海台地上に営まれた縄文～古墳時代の複合遺跡です。昭和59年のほ場整備工事で貝殻や土器片の散布が確認され、工事を中止し緊急発掘調査が行われました。発掘調査では縄文土器、石器などが出土したほか、縄文時代の土坑からハイガイやカキなどの貝が多量に出土しています。

また遺跡の南側では有舌尖頭器(3頁掲載)が採集されており、縄文時代草創期からこの地に人の活動が始まっていたことがわかります。

い や ま 居山遺跡(南中根町／縄文時代中期～晩期)

朝鮮川に向かって広がる開析谷奥の碧海台地上に位置する遺跡です。昭和59年のほ場整備工事により遺跡は既に失われていますが、この地域の集落動向を考える上で重要な遺跡です。遺物は土器と石器が採集されており、縄文土器は縄文時代中期～晩期のものが採集されました。なかでも中期～後期のものが多く見つかっています。

あら こ 荒子遺跡(南中根町／縄文時代中期)

朝鮮川に向かって広がる開析谷奥の沖積低地部分に位置する遺跡です。昭和59年のほ場整備工事の際に発見され、試掘調査が行われました。調査の結果、縄文時代中期の遺跡であることが確認されました。



し が け 石垣遺跡(一色町佐久島／縄文時代中期)

佐久島唯一の縄文遺跡

アート作品で有名な「おひるねハウス」付近の、佐久島西地区の大浦湾に面した海岸近くに位置しています。ここでは、縄文時代中期の土器や磨製石斧、石錘(魚撈に用いるおもり)が採集されました。

縄文時代の人々は舟を利用して三河湾内の島に渡り、居住空間を広げていったようです。



縄文文化の発展

縄文時代後期～縄文時代晩期



三河湾沿岸では縄文時代後期から晩期にかけて大規模な貝塚がいくつも形成されました。西尾市域にも後期の八王子貝塚、晩期の枯木宮貝塚など東海地方の後・晩期を代表する貝塚遺跡が存在しています。深鉢・浅鉢・注口土器などの土器、土偶や石棒などの祭祀具、漁撈や狩猟の道具、装身具類など多種多様で良質な遺物が発見されており、三河湾地域での縄文文化の発展とその豊かさを感じさせます。また、貝塚では貝のカルシウム成分により埋葬された人骨などの保存状態が良好で、当時の埋葬文化の様相をうかがい知ることができます。

はちおうじ

八王子貝塚 (上町／縄文時代後期) 県指定史跡 県指定文化財

矢作川左岸の碧海台地縁辺部に立地する貝塚遺跡です。遺跡範囲は約6,000㎡に及び、愛知県指定史跡となっています。

貝塚を構成する貝類はハイガイ・ハマグリ・マガキ・ヤマトシジミ・フトヘナタリガイ・ウミナなど遺跡全体で50種類以上に及び、海産資源に恵まれていたことがわかります。また、シカやイノシシなどの哺乳類、ハゼなどの魚類など多様な動物依存体が発見されており、狩猟や漁撈が盛んに行われていたと考えられます。

はちおうじ

八王子貝塚出土品

関東地方の影響を受けた土器や、漁撈や狩猟など当時の生業に関する道具、縄文時代人の精神世界をうかがわせる土偶、装身具類などさまざまな遺物が出土しています。出土遺物のうち586点が県指定有形文化財(考古資料)に指定されています。波状の口縁部や土器上部に施された磨消縄文が特徴の土器群は「八王子式土器」と命名され、東海地方における縄文時代後期中葉の標識土器となっています。

*磨消縄文…土器の表面に紐を回転させて縄文を施文した後、沈線で区画し、外側の縄文を磨り消して文様を際立たせる手法



発掘調査記念碑(昭和8年建立)



昭和56年発掘調査風景

八王子貝塚は明治時代から学界に知られた遺跡で、鳥居龍蔵や大場磐雄など著名な学者による発掘調査が行われています。

写真は昭和56年に西尾市が本格的な調査を行った時の様子で、この調査で、八王子貝塚を代表する土器群が見つかりました。

しんみどう

新御堂貝塚 (ハツ面町／縄文時代後期)

ハツ面山の南麓に立地する遺跡です。昭和48年の水道管埋設工事の際に貝塚と人骨が発見され、緊急発掘調査が行われました。貝塚は縄文時代後期前葉に形成されたもので、ヤマトシジミやハマグリなどの内湾性の砂泥を好む貝類が確認されています。

縄文土器、石器、土製耳飾りや貝輪などの装飾品等が出土しています。



第1次調査貝層堆積状況

かれきのみや

枯木宮貝塚 (寺津町・巨海町／縄文時代後期末～晩期)

県指定史跡

碧海台地の東端に位置する貝塚遺跡です。貝層が分布する範囲は東西約40m、南北約200mで、このうち寺津中学校グラウンドの8,456㎡が県指定史跡となっています。貝層と遺構の中心的な時期は縄文時代後期末から晩期で、集落は晩期前半にピークを迎えています。また、多数の建物跡や埋葬遺構が検出されており、縄文時代の集落構造を考える上で、良好な情報を提供しています。貝層はハマグリ・マガキが主体で、シカ・イノシシのほか、マダイ・クロダイ・サメ・イルカなどの骨が出土しています。



第1次調査風景(昭和43年)

14～22号人骨の出土状況

枯木宮貝塚ではこれまでに計26体の埋葬人骨がみつかっています。特に寺津中学校グラウンド北側の第6次調査区では、集中して埋葬遺構が検出されました。埋葬遺構の上層の貝層には土器・石器・骨角器などの遺物が多く含まれており、当時の貝塚は単なるゴミ捨て場ではなく、魂の送り場でもあったと考えられます。



寺津下層式(後期末)



寺津式(晩期前葉)

枯木宮貝塚出土の縄文土器

土器の形や文様、製作方法などは時代ごとに変化します。枯木宮貝塚から出土した縄文時代後期末の土器は「寺津下層式」、縄文時代晩期前葉の土器は「寺津式」と命名され、それぞれ東海地方の土器型式の標識資料となっています。



枯木宮貝塚出土の装飾品類

道具類のほか、貝輪・耳飾り・ペンダントなど様々な装身具が出土しています。素材も貝や土、鹿骨など様々です。

ごさごやま

五砂山遺跡

(東浅井町／縄文時代後期～晩期)

五砂山の東麓の傾斜から低地にかけて広がる遺跡です。

出土遺物は晩期前葉の寺津式土器が主体となっており、枯木宮貝塚と同時期の遺跡です。



すみさき

住崎遺跡

(住崎町／縄文時代晩期末)

西尾城跡から南に約800m、碧海台地東縁とその東側の沖積低地に広がる集落遺跡です。縄文時代後期末と考えられる溝状遺構が発見されています。沖積低地内の微高地と海から吹き上げられた砂による砂堆との間の泥炭層から大量の遺物が発見されており、縄文時代後期末の土器、石器、土偶などが出土しています。



溝状遺構の土器出土状況



縄文時代晩期末の土器

八王子貝塚にみる祈りの道具

土 偶

遺跡から出土する考古資料の中には、当時の人々の祈りや願いが表現されているものもあります。縄文時代の祭祀具とされている土偶はその代表的な遺物です。



分銅形土偶



人形土偶

八王子貝塚ではこれまでに30点の土偶が出土しており、写真のような分銅のような形の板状土偶と人形土偶の2タイプが確認されています。分銅形土偶は四肢や頭部が省略された東海地方独自のもので、「八王子タイプ土偶」と呼ばれています。

土偶は女性を模したものが大半で、安産や子孫繁栄の願いが込められていると考えられています。破損した状態で出土することが多いため、祭祀の際に故意に壊すことにより災厄を払う意味があったのかもしれません。

枯木宮貝塚にみる

縄文時代の埋葬

貝塚遺跡では貝殻のカルシウム分の作用によって人骨の保存状態が良好で、縄文時代人の風習や精神活動の一端を知ることができます。

枯木宮貝塚ではこれまでに計26体の埋葬人骨が見つっています。三体合葬や盤状集骨葬などの埋葬方法のほか、抜歯や叉状研歯などの風習も見られます。また、犬の埋葬も確認されています。



さんたいがっそう
三体合葬

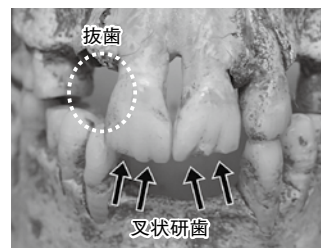
左は18～20歳の男性、右は20歳前後の男性、真中は9歳前後の幼児の人骨です。合葬の中でも大人が子供の上に乗る事例は稀で、埋葬された時期に差がある可能性が指摘されています。



ばんじゅうしゅうこつそう
盤状集骨葬

三河湾沿岸地域でのみ見られる特異な埋葬です。

一度土葬したのち骨を取り出し、手足の骨を方形に、その四隅に頭蓋骨を置き、その中へ肋骨などを納めています。5歳未満の幼児1体分の骨で構成されている、唯一の幼児骨単独葬例です。



ばっし さじょうけんし
抜歯と叉状研歯

縄文時代、抜歯は人生の通過儀礼として広く行われました。前歯に切り込みを入れる叉状研歯は限られた人物にのみ見られる風習です。



まいそうけんこつ
埋葬犬骨

犬の骨は計3体が確認され、人の埋葬区域と区別されることなく手厚く埋葬されています。猟犬としてだけでなく、大切な家族の一員としても扱われていたことがうかがえます。